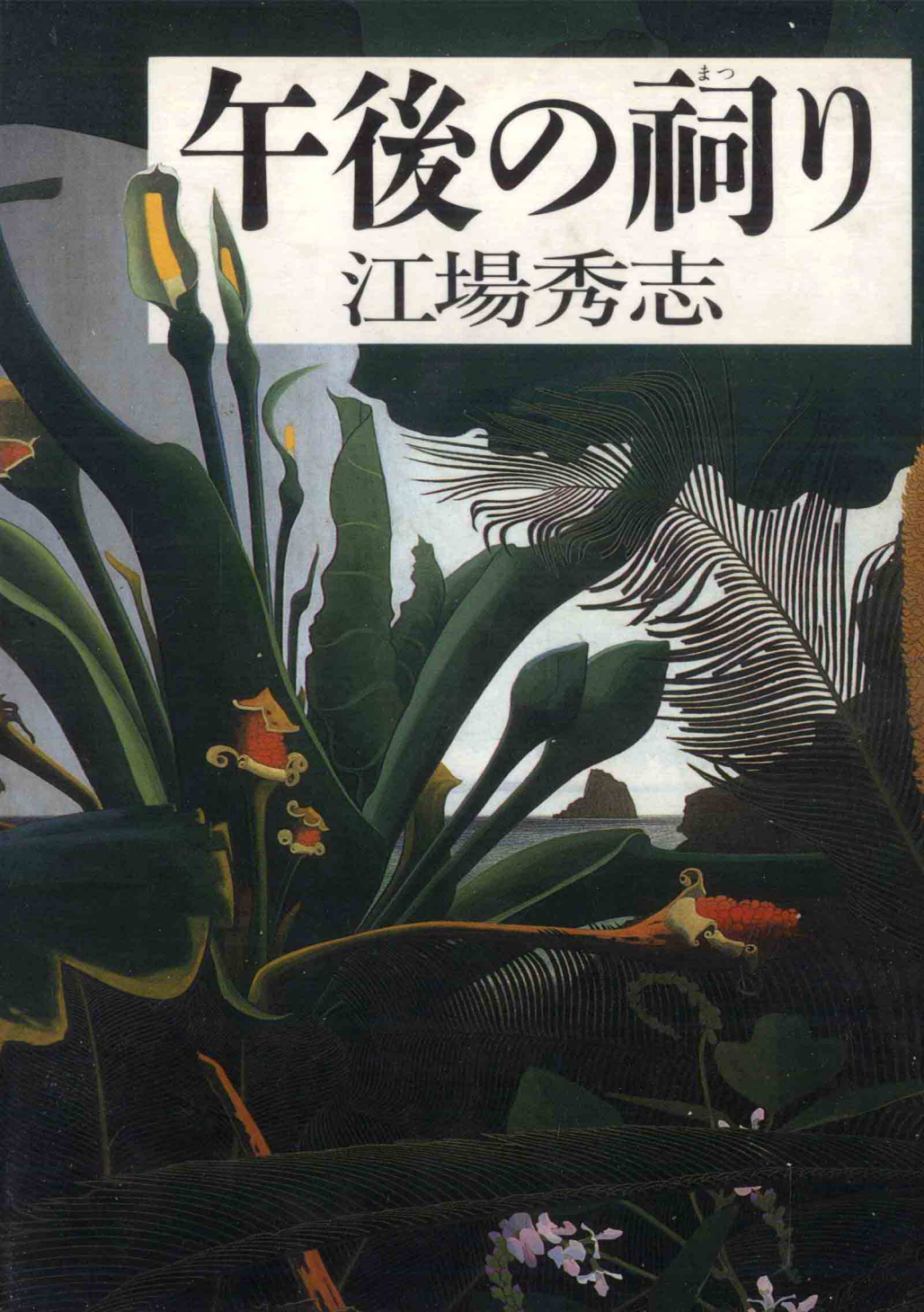
# 午後の祠(まつ)り

江場秀志



# 後の祠（まつ）り

江場秀志

集英社

午後の祠り

一九八七年 八月一〇日 第一刷発行

著者 江場秀志

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三) 二三〇―六一〇〇
販売部 (〇三) 二三〇―六一七一
製作課 (〇三) 二三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

定価 一一〇〇円

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。

本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

©1987 H. Eba Printed in Japan ISBN4-08-772615-0 C0093

# 目次

午後の祠り　5
獅子の街　149

装　画　田中一村
（「田中一村作品集」
日本放送出版協会刊より）

デザイン　岡　邦彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 午後の祠(まつ)り

# 午後の祠り

# 1

ガジュマルの気根が束になってもつれ合い、大地を求めあぐねている。わずかな揺れの気配さえもない。静かな呼吸だ。蔦が幹をあらかたおおいつくしている。旺盛な枝ぶりに、夏の直射日光がほとんど遮られている。ナベ婆は香炉がわりにするつもりで、突き出た岩の窪みに小石を集め、小さく囲った。震える手ですくい取った砂を、やっとその中におさめた。火をつけて線香を立て、目を瞑って手を合わせた。樹木や草や石が、暑熱の中、じっと息をつめる。この動きの停まった瞬間はあれのおこる予兆だ、とナベ婆は胸をときめかす。息をつめ、じっと待った。霊が漂い出し、グソウ（後生）の人のものらしい声が乗り出してくる。オバーはまだこっちにくるのははやいさ。誰ね、オバーに話しかけてくるのは誰だわけ？　だれでもいいさ。みんなグソウからオバーやヨネやカヨをみまもってい

るからよ。じぶんでうんにさからうようなことをしたらだめ。運にさからうって、何な？さいごまでトートーメー（位牌）をまもらんといかん。ヨネがかえってくるまではオバーしかトートーメーをまもりきれるものがおらんのによ。ヨネが村に帰ってくる？　そこまでわかってて、なんでこんなに待たせるね、なんでこんなに待たせるわけ？　答えのないまま声は先細りにかき消え、息をつめていた樹木や草や石が、暑熱にぐったりしてあるかなしかの呼吸を始める。目を開けた。線香が元のところまで燃えつきかけ、斜めに倒れるところだった。ナベ婆はもう一本線香に火をつけ、もう一度目を瞑って手を合わせてみた。さっきまで聴こえていたグソウの人のものらしい声が、いくら耳をそばだてても裡に届いてこない。グソウの声を誘い出すはずの樹木や草や石も、そろそろこの油照りの中、午睡の時間なのかもしれない。

ナベ婆は岩に影を落としているガジュマルの枝を見上げた。鬱蒼と生い茂った枝葉の重なりのあいまから、わずかな木漏れ陽がほとんどまっすぐに落ちている。この陽の射し具合だと、もう正午は過ぎている。にわかに、カヨの昼の食事のことが気になりだした。先細りにかき消えた声が心残りだった。祈りに気持を込め足りなかった気がした。しかし、この時間帯では現し世はあまりに明るく、グソウからの声をこの胸に受けるにはけだるすぎる。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

線香やマッチや塩を布袋に片付けているうち、ナベ婆の気持はもう一つ揺れた。かき消えた声の続きを問い質したい衝迫感が、胸の奥底のところでくすぶり続けた。そうだ、どこか別のウタキ（御嶽）をさがしてみよう。祈りにもっともっと力を込めて、午睡に入っている樹木や草や石に目醒めてもらうのだ。手の震えをできるだけ気力でおさめ、布袋の紐をしっかりしめた。娘ヨネがこの世のどこかに生きているというグソウの声。ヨネさえ村に帰れば、カヨだってオバーと暮らすより、母親の手の許、この先ずっと安心して生きていける。

吹きだまった腐葉土や踏みしだかれたとわかる草の生え具合を目じるしに、ナベ婆はよたつく足を引きずった。口が渇いていた。布袋に、小さな水筒くらい入れておけばよかった。沢の音に耳を澄ませてみた。油蟬の鳴き声だけだった。この道の先に、ほんとにウタキなんてあったろうか。

倒木で行く手を遮られたところで草の上に腰をおろし、頼りなく地にへばりつく灌木の幹を背もたれに寄りかかった。小枝が背にあたり、幹が後ろのほうにしなった。疲れがどっと出た。いつまで経っても、膝の上に置いた手の震えが止まらない。カヨはひもじい思いのまま、この暑い盛りの中、どれくらいの間我慢できるだろう。はやくもう一つのウタキをまわって、家に……。思いだけがせいた。呼吸が落着いてくるにつれて、せいた気持

と睡魔の引っ張り合いになった。最後までトートーメーを守りなさい。さ・い・ご・ま・で……。人を呑み込むような声のほうに引きずり込まれて、ナベ婆は深い眠りの底に落ちていた。

肩を叩かれて目醒めた。添い寝してやっていたカヨの手が、自分のほうに伸びてきたのだと思った。折りたたんだ釣竿と餌箱を手にして、青年が立っていた。

「こんなところでどうしたな。軀の具合でも悪そうやさ」

カマヨシ爺の孫嘉一青年だ。カヨより三つ歳下だから、確か二十二歳くらいだ。

「グソウの声で金縛りにあってたみたいな感じだったさ」

「グソウの声？　何な？　それ」

嘉一青年は釣竿と餌箱を草の上に置いて、ナベ婆と顔をつき合わす位置にしゃがみ込んだ。

「ヨネが村に帰って来るはずだから、それまでしっかりトートーメーを守りなさいとかなんとか、そんな声だったさ。何が何だかわからんよ」

「オバーが勝手に考えた望みごとみたいやさ」

「勝手に考えたんじゃないよ。ほんとにこの耳で聴いているさ」

「この暑さでうなされていたんとちがうな？　手もひどく震えているしよ」

「手の震え？　これはもうだいぶ前からでてきているよ。オバーは熱にうなされて夢の話してるんじゃないよ。声の続きを聴かんとなんとのう落着けんような感じになって、だ、何ウタキいうたかね、この先にもう一つあったさ、そこに行くつもりで、迷ってしまっているよ」
「この先にウタキ？」
嘉一青年はナベ婆が払いのけようとするのもかまわず、額に手をあてた。
「熱はないみたいな。オバーよ、いくら出歩くいうても、もう歳を考えんと」
「熱にうなされたんじゃない。グソウの声は絶対この暑さのせいなんかじゃないよ」
ナベ婆は顔じゅうの皺を険しく眉間に引き寄せ、少しむきになった。ふつうの血迷いごととは訳が違う。確かにこの耳で、この心で聴いた。立ちあがろうとしかけると、膝の上にあった手が落着く場所を失って、震えがいっそうひどくなった。
「いくらウガミ（拝み）のためでも、この先にウタキなんかないよ」
「わからんくなっているさ。うろ覚えに通ったことのある道の気がするんだけどよ」
「この先は海のそばに切り立った絶壁。よく道を知ってないと危ないよ。外村（とし）の者が釣り帰り、ハブに咬まれたりもしているしよ」
嘉一青年は立ちあがり、釣道具といっしょに、ナベ婆のウガミ用具を入れた布袋をも手

に持った。餌箱から秋刀魚の臭いが押し広がり、嘔気がした。
「ライトバンでオバーの家まで送るさ。車のあるところまで歩ける？　きつかったらおれの背につかまるな？」
「背？　まだそんなに老いぼれてはいないさ」
　気を鎮めて手の震えを抑え、しっかりした腰つきで立とうと思った。あの声は暑さのためでも血迷いごとのためでもない。立ちあがりぎわ、頭が少しくらくらした。あわててつかんだ灌木の枝がしなだれ、倒れそうになるところを嘉一青年がすばやく手を伸ばし、抱き起こしてくれた。まつわりついていた蚋の群れが羽音をたてて散り、すぐまとまって、行く手を遮る。あちこち刺されていた。ところかまわず掻きながら歩き始めた。すぐ息遣いが荒くなった。別の息遣いがかぶさってくる。トートーメーをまもらんといかんさ。と・ー・と・ー・め・ー・を……。グソウの声だ。
「オバー、やっぱりおかしいさ。何ぼんやりしてるね。おれ、道具全部車のところに置いてから戻ってくるからよ、それまでここで休んでたらいいよ。おぶってやるさ」
　歩いているつもりが、気付かないうちにぼんやり突立っていた。
「心配いらん。このごろカヨのことで、ちょっと物考えがひどくなっているだけ」
　ナベ婆は我に返り、気持に鞭打って、歩みにはずみをつけた。嘉一青年も促されて、ゆ

っくりと先を歩き始めた。時々枝をひきちぎってはあいたほうの手でいじくり、振り返った。気遣ってくれているのだ。眉毛も顎鬚も濃く、潤いをたたえた目が、陽焼けした顔に深く落ち窪んでいる。カマヨシ爺の若いころとそっくりだ。その目は、村内(しまうち)のことならなんでも知っていそうに思えた。なのに、あの声のことは、この青年にはわかってもらえない。

歩くほどに、口の渇きがひどくなってくる。唾液が粘ついて麻痺してしまっている。腐葉土の湿気が、思いなし強くなってくるように感じた。ほそい沢沿い、かすかに水の伝う音がした。

「ちょっと待ってくれんね。ここらへんに水の湧いているみたくあるさ」

「水？　オバーは喉が渇いていたわけな？　早く言えばよかったのによ。アイスボックスにコーラが入っているよ」

「コーラね、あれはクスリみたくて、オバーにはとても飲めんさ」

ナベ婆は山道から沢のほうに足を突き出し、まだ腐葉土になりきってない古い落葉をひっくり返した。沢伝いの水音は錯覚だった。落葉の下は湿り気を帯びた腐葉土が重なっているだけで、舐めるほどの水もたまってはいなかった。

「無理さ、今年の夏は一ヶ月も雨が降ってないのによ」

ナベ婆は舌打ちしながら折った腰を戻した。嘉一青年がキャップを切ったコーラ缶をナベ婆の口許まで持ってきた。

「喉の渇いたの我慢するよりはましやさ」

ナベ婆は震える手でコーラの缶を受け取り、中味を口に流し込んだ。思いもかけず渇きは癒され、ナベ婆は青年への面目も考えずに最後まで飲み干した。

あちこち錆の浮き出た小型ライトバンは、パイン畑の終る山の端ぎりぎりの小径で西陽を受け、半開きの窓ガラスが光そのもののようにまばゆく目を遮った。嘉一青年はドアを開け、肩を手で支えて、ナベ婆を助手席に座らせようとした。

「車くらい、他人(ひと)の手借りんでも、まだまだ乗りきれるさ。手抜きのう、今でもカヨの世話し続けているくらいだのによ」

右足を支えにはずみをつけて車に乗る時、腰に鈍い痛みが走った。ナベ婆は我慢して、なんでもないふうに振る舞った。腰を落着けた座席は埃だらけで暑く、乾涸びた肌のどこにたまっていたかと思うような脂汗が、粒になってじっとり湧き出した。はやくカヨの軀を拭いてやらないと、汗で気持悪がっているにちがいない。下(しも)のほうも、漏らしっ放しかもしれない。

車は山あいや山の端を何度も迂回して、やっと海沿いの国道に出た。リーフでしきられ



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com